



編集後記

駅で鳴らされる発車ベル、そのけたたましい響きはなぜか人を掻き立て急がなくても良いのに駆け込み乗車を誘う感があった。ところが昨今は発車ベルではなく発車メロディとやらになり、それぞれの駅が工夫を凝らした楽曲やメロディを提供してくれる。大阪の心齋橋なら「だつて好きやねん」、東京の高田馬場駅は「鉄腕アトム」、地下鉄銀座線の銀座駅では「銀座カンカン娘」が流れ続ける。思わず口ずさみたくなくなるお馴染みのメロディだ。

ところでこの「銀座カンカン娘」のサビの部分はどう歌われるのだろうか。レコードになった高峰秀子さんは「これが、ぎんざの〜」と歌っている。先日、たまたまだが映画の「銀座カンカン娘」の未発表映像というのを観るチャンスがあった。昭和の名人と言われる古今亭志ん生師匠が出演していることでも知られる名作だが、そこではブギの女

王、笠置シズ子さんが「ぎんざの〜」と歌っていたのだ。些細なことだが私たちが日常話す日本語では銀座は「ぎん」と「ざ」の2音である。耳馴染みとしては「ぎんざの〜」の方がしっくり来る。かの歌姫、ユーミンこと荒井由実さんの名曲「グッド・ラック・アンド・グッド・バイ」には昔の恋人に再会し微笑む顔が少しはかむのを「むかしのままだわ」と歌うが、「むかしの」と「ままだわ」の間にひと呼吸はいるのでうっかり聞くと「昔のママだわ」と母親の若い頃の話になりかねない。

さて、昨今の日本語だが、いささか妙なイントネーションや言い回しが耳につくのだが如何だろう。

レストランでは「こちらの方、カレーライスになります。」：「カレーライスになるのは良いがいったい元はなんだつたのだろうか。」：「カレーライスをお持ちしました。」ではいけないのだろうか。天気予報では「急な雨はこの低気圧のせいだし。」：「なんで気象予報士はいちいち言い訳をしななければならないのか。」：「急な雨はこの低気圧のせいだし。」ではいけないのだろうか。大流行の「癒される」だが、癒すのは傷ついているからである。もともとキリスト教の新約聖書など

で宗教的な奇跡（奇蹟）的治癒を行う動作の意味で使用されている。日本人は奇跡的治癒が必要なほど傷ついているのだろうか。こうした耳になじまない日本語は枚挙に暇がない。「〜でよろしかったでしょうか。」：「良いでしょうか」（なぜ過去形）、「見て取れる。」：「見える」（見れるよりはましか）、「勇気をもらいました。」：「勇気づけられました」（先方は上げたつもりはないかもしれないではないか）。

どうもこうした用法の元はテレビにおけるタレントと呼ばれる方々やアナウンサーにあるようだ。それがスポーツ選手やテレビ・ラジオに登場する芸能人・文化人にまで蔓延し、国民に広く拡散したのだ。もちろん、言葉は変遷するものであるし、時代とともに移ろっていくものである。ラ抜き言葉など良い例で、既に完全に市民権を得ている。自転車のことをチャリンコと言い回すのも今やごく普通のことになっている。それでも子供がインタビュースされて「勇気をもらいました」などと発言しているのを聴くとどうしても違和感を禁じ得ない。

今一度、マイクの前に立つひとりひとりが日本語を見つめ直す必要を感じるのだが、いかがだろうか。（溪）

月刊公論 MONTHLY
KORON

6月号 第51巻6号

平成30年6月1日発行 毎月20日発売
本体価格848円（税別） 送料86円

発行人 大中吉一 編集人 林 溪清
発行所 株式会社財界通信社
〒160-0008 東京都新宿区三栄町25ポナフラービル
TEL.03-5379-5611(代)、FAX.03-5379-5616
印刷所 株式会社廣濟堂
取次店 日本出版販売／大阪屋栗田

●直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
●万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。